令和 3年 3月

井上菜穂　学位論文審査要旨

主　査　　吉　岡　伸　一
副主査　　難　波　範　行
同　　前　垣　義　弘

主論文

Psychological preparations affecting the emotions of children with developmental disorders toward hospitals

（発達障害児の病院への感情に影響を与える心理学的プレパレーション）

（著者：井上菜穂、岡西徹、井上雅彦、前垣義弘）

令和 3年　Yonago Acta Medica　64巻　92頁～97頁

参考論文

1. 障害児のきょうだいの心理的支援プログラムの効果

（著者：井上菜穂、井上雅彦、前垣義弘）

平成26年 米子医学雑誌　65巻　101頁～109頁

学　位　論　文　要　旨

Psychological preparations affecting the emotions of children with developmental disorders toward hospitals

（発達障害児の病院への感情に影響を与える心理学的プレパレーション）

小児医療における心理学的プレパレーション（以下：プレパレーション）は、小児患者が手術などの心理的ストレスの大きい状況において、ストレスを緩和させる目的で発達してきた。医療スタッフとコミュニケーションをとること、手術室の電灯や騒音を弱くする、文字や絵、ことばを使っての診療の説明などが含まれ、現在では外来診察や検査などにも応用されてきている。一方、発達障害児に対して、病院でどのようなプレパレーションを行うことで、病院に対して肯定的または否定的感情を抱くのかについてはよく知られていない。本研究では、自閉スペクトラム障害（ASD）または注意欠陥多動性障害（ADHD）の小児患者と保護者へ質問紙調査をおこない、病院に対する肯定的・否定的感情に影響を与えるプレパレーションを明らかにすることを目的とした。

方　法

ASDまたはADHDの小児患者とその保護者を対象とし、質問紙調査をおこなった。保護者への質問として、患者背景（年齢、性別、知的障害の有無、発達障害の種類、併存症、服薬の有無、感覚過敏の有無とその内容）、病院のプレパレーションの状況（医師の診察室での物質的なプレパレーションの有無とその内容、医師による治療説明の有無とその内容、医師による診察室でのプレパレーションの有無とその内容、治療・検査室での物質的なプレパレーションの有無とその内容、医療スタッフによる検査内容の説明の有無とその内容、医療スタッフによる検査時のプレパレーションの有無とその内容）を調査した。患者に対しては病院への肯定的感情（次も病院に行きたいか）、否定的感情（怖い体験をしたことがあるか）を質問した。回収後、患者の病院に対する肯定的または否定的感情に対して影響を与える背景因子と病院でのプレパレーションの種類を統計的に解析した。

結　果

68人の患者（6～15歳、男53人、女15人）のうち、患者の主な診断がASD 54人、ADHD 14人であった。知的障害は6人、感覚過敏は50人に認めた。診察室での物質的なプレパレーシ

ョンがあったと答えたのは26人、医師が治療説明をしたと答えたのは51人、医師の診察室でのプレパレーションがあったと答えたのは39人（自由会話による緊張緩和が35人）、治療・検査室で物質的なプレパレーションがあったと答えたのは19人、医療スタッフは検査内容を説明したと答えたのは51人（言葉による説明が48人）、医療スタッフが検査時にプレパレーションを行なったと答えたのは46人であった。病院で怖い体験があると答えた患者は34人、次回も病院に行きたいと答えたのは31人、行きたくないと答えたのは12人、どちらでもないと答えたのは23人であった（2人無回答）。

統計解析の結果、病院での怖い体験の保有という否定的な感情ついては、知的障害または感覚過敏を有することが正に有意相関し、検査をおこなうときに医療スタッフによる説明がなされたことは負の有意相関がみられた。また、外来診察室にて医師が自由会話などのプレパレーションを行なったことは、次も病院に行きたいという肯定的な感情と正の相関を示した。一方、診察室や検査室などでおもちゃ、人形、絵本などの壁の装飾などの物質的なプレパレーションはこれらの感情に相関を示さなかった。

考　察

本研究では、発達障害のある小児患者のためのプレパレーションについて、病院に対する感情に影響する2つの要因が明らかになった。1つは、検査または介入に関するスタッフによる説明で、怖い体験の保有に負の相関を示したことから、スタッフが丁寧な説明をおこなうことで怖い体験が減少すると考えられる。もう1つは、診察時に医師が行ったプレパレーションで、子どもたちの「次も病院に行きたい」と思う感情と正に相関した。これらのことから、対人コミュニケーションを用いたプレパレーションをおこなうことは、病院への感情に良い影響を与える可能性があることが示唆された。一方、本研究においては、物質的なプレパレーションはこれらの感情に影響することを確認できなかった。

また、患者背景として、知的障害または感覚過敏を有することは怖い体験の保有に正の相関を認めた。これらの併存症は発達障害に多く認めるものであり、これらある場合は特に丁寧なプレパレーションをおこなうことが必要であると考えられる。本研究から得られた結果は、医療以外の場においても活用していくことができると考えられる。

結　論

発達障害のあるこどもは、定型発達のこどもよりも不安感情が起こりやすく、定型発達のこども以上に医師や医療スタッフとのコミュニケーションを中心としたプレパレーションを提供することが望ましいと考える。